
ある守護者の話。

こーこうせい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある守護者の話。

【Nコード】

N2648Y

【作者名】

こーこうせい

【あらすじ】

いつもどおりの毎日を望む一人の魔導士、アキナ||ナカジマに訪れた非日常。

魔法少女リリカルなのはStrikerSの二次創作。オリ主の二次小説ですよー！！

目指せ！週一更新！！

第1話 急な異動。出向、機動六課（前書き）

どもも！こーこうせいです！

2つもやってるのに調子乗りました。はい。

ってか前々からやりたかったStrikerSです。実は原作コレが一番好きですよW W

オリ主、オリジナルストーリーありな気がしますよ！

そういうの無理って人はバック転しながら退却しましょう！

第1話 急な異動。出向、機動六課

新暦75年 春

そろそろ桜も満開になろうという時期。ある人は出会いに喜び、ある人は別れに涙するこの頃。

とある場所に二人の男がいた。一人はすこし年のいった男。一人は長身の男。黒い髪にキツイのが目に付く。

「ゲンヤさん。話ってなんすか？」

「ああ？ お前俺のことは親父って呼べっていつてるだろ？ アキナ」

そこにいたのは

時空管理局 三等陸佐 ゲンヤⅡナカジマと
時空管理局 一等陸士 アキナⅡナカジマ

アキナはゲンヤが座っている場所の正面に座った。
ソレを見てゲンヤは話し出した。

「お前が俺の部隊に入って、もう半年。お前の成長ぶりは凄いからな。俺はお前にいろんな経験をさせてやりたいと思ってるんだ」

アキナは現在ゲンヤが持つ部隊、陸上警備隊108部隊に配属されている。配属で半年だが既に数々の任務を難なくこなせている。実は魔法を使うようになったのは数年前なので、その成長振りはすさまじかった。

「はぁ……」

「お前も今年で17。うちに来たときはまだちっせえガキだったが今じゃ俺よりでけえ」

「あの、話が見えねえんですけど？」

アキナは如何にも分かりません。といった顔でゲンヤを見る。

「そうだな……。単刀直入に言おう……。――――お前異動な」

◇攻撃魔法が使えない魔導士

第1話 急な異動。出向、機動六課◇

現在、アキナは自分の荷物を整理していた。正直急な異動なので何を持っていけばいいか分からない。なのでとりあえず数日分の着替えと、少し大目の金、愛用している音楽プレイヤーのみを入れて準備を完了としておいた。

明日から行くのは……機動六課、か。

一人思うアキナ

時間は少しさかのぼり、ギンガに頭をグーパンされた後のこと

「……で？俺はどこ行けばいいんすか？ゲンヤさん？」

「おお、受けてくれるのか。ありがとう」

いや、受けてくれるって。上司の命令は絶対でしょうが

「でな、お前が行くのは時空管理局本部古代遺物管理部『機動六課』だ」

「機動六課？」

聞いたことのない言葉にアキナは聞き返した。

「ああ。今回俺の下にいる狸……もとい八神が部隊を立ち上げるんだわ」

そういいつつ、ゲンヤは俺に資料を渡してきた。そこに乗っているのは機動六課の名簿表。アキナはソレに目を通すなり

「ブフッ!!?」

飲んでいたお茶を吹き出した。
おいおい、何だこの面子は。

管理局のエース 高町なのは一等空尉

金の閃光 フェイト・T・ハラOWN執務官

部隊長である夜天の主 八神はやて

それに八神はやての固有財産であるヴォルケンリッターの面々

どれも管理局内の有名人物じゃないか!!

「……で？この面子の中に入って俺が何をしろと？戦力的には十分すぎますよね」

こんな面子に入ったところで俺だけ浮くじゃねか。

「もっとちゃんと見ろ。下のほうだ」

ゲンヤに言われ、アキナはリストの下のほうを見る。
そこにいたのは

「スバル？」

「ああ。もっと下を見てみな」

スバルというのはゲンヤの娘。

ナカジマ家は大黒柱、ゲンヤをトップにして、年齢順にギンガとアキナ、スバルという。ギンガとアキナは同じ17歳だ。ギンガとアキナはゲンヤ率いる陸上警備隊108部隊に所属していて、スバルは訓練校を卒業後、災害救助の方の部隊に入った。

名簿をさらに下に見いていくと。そこにいたのはティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエとある。

スバルを含めるすべてのメンバーがほとんど実戦経験もないような新人。エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエなんてまだ10歳だ。

「……どういつもこいつも新人ばかり…」

「ああ、そうだ。隊長陣は有名でもその下がな。だから俺はお前に頼んだんだよ。お前は新人ではあるが既に任務をこなしてるし、実力もある。それにこれから先のためにもなると思う。どうだ？そこまで悪い話じゃないだろう？」

うーん、とアキナは呻く。

「いやね？正直面倒くさ……俺より実力ある奴の方が……ほら、ギンガとか」

「お前今めんどくせえつつたろ？ってか話し聞いてたか、おまえ。それにギンガはダメだ。」

「なんで」

「娘に怪我をさせろと」

「俺ならいいってか!!?」

くそう。俺の扱いひでえな

「ま、俺はお前を信じてるんだよ。じゃ、明日から頼むわ」

それだけ言ってゲンヤは部屋を出て行った。一人部屋に残されたアキナは

「仕方ねえ！ いっちょやってやりますか！！」

と決意を決めた。

辞令伝達

アキナⅡナカジマ（17）

明日より時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課へ出向を命ずる。

第1話 急な異動。 出向、機動六課（後書き）

感想待ってます…ってか1話じゃ無理だよねw

第2話 始動（前書き）

結局二日連続更新です（笑）

まあ、たいした事やってませんけどね。

ティアナとは、なんとなくくつつけたい今日この頃。

第2話 始動



8..12

「はやてちゃん。今日から始動、だね」

「そやね……これは私の夢でもあるんや。氣い引き締めな」

今私、高町なのははこれからお世話になる機動六課の隊舎の部屋を一つ一つ回っている。

機動六課は私たち3人の夢でもある。いろいろな人に協力してもらってやっとできた部隊。大事にしくちやいけない。

「それにしてもよかったね、なんとか隊員集まって」

「ほんとや……なのはちゃんとフェイトちゃんの紹介がなかったら今日はじめられなかったわ」

はやてちゃんは思いつき息を吐きながら言った。

実はメンバーを集め終わったのはこの間だったりする。原因は直前まで相談しなかったはやてちゃんと、そのはやてちゃんに知り合いがほとんどいないって言うこと。本局に顔が利く人がほとんどいないせいで後見人もみんな身内。部隊が発足できたのも後見人の功績のおかげって言うのが大きい。だから今回の部隊のロングアーチは

誰もが知っている人とか、過去にお世話になった人ばかり。知らないのは今回スカウトした新人達ぐらいかも。

「そういえば、はやてちゃんが言ってたもう一人の隊員ってどうなつたの？」

「ああ、ゲンヤさんが紹介してくれた人ね。私もよく知らないんよ。ゲンヤさんの部隊にいる新人で優秀な成績を残してる人らしい。私らの隊員が新人ばかりなのが気になったんで、こいつ貸したるっ！
って」

「にやはは……私がスカウトしたティアナとスバル、フェイトちゃんのところのエリオとキャロも新人だもんね」

「せや。と、そこで紹介してもらったんよ」

「へえ……どんな魔法を使う子なの？」

そういつて私ははやてちゃんから資料を受け取った。
そこに書いてあったのは

「アキナ||ナカジマ一等陸士……あれ？スバルの家族の方なんだ。
保有魔力量B+、陸戦ランクB……使用魔法……プロテクション！
！？はやてちゃんどういうこと！？」

「そ。そこが謎なんよ。使用魔法のところにプロテクションで……
よく分からん人なんよ。それでも陸戦ランクBって」

「どんな子なんだろうね……」

「あ、あとその子の推薦者はゲンヤさんだけやないで？ なんとユーノ司所長も推薦しとる」

「ユーノ君が！！？」

なんでユーノ君が……

「面白い舞台になりそうだね……」

「私も楽しみや」

私達は心躍らせながら引き続き部屋を回る。今日の9時に全員が集まる。私は既にそのことが待ち遠しくて仕方がなかった。

第2話
始動！

8..53

「うん……?」

くぁ……!!よく寝たなぁ……

アキナは自分のベッドから起き上がり大きく伸びをした。体の骨がポキポキと音を立てた。

「つてか今何時だよ……」

そういつて自分の頭の上にある時計を見ると

8..54という文字

ここから隊舎まで軽く20分はかかる

えーと、新人セレモニーが9時からだから……

「ド遅刻ド欠席!!!!?」

アキナは光のごとくの速さで着替え、荷物を持ち、準備した。

てかなんで目覚ましならねえんだよ!!昨日ちゃんとセットしたのによお!!

自分の部屋から出て、階段を降り、玄関まで来るとそこにはなぜか

ゲンヤが

「おいおい！どいてくれよ！早速遅刻しそうなんだよ！！？」

「まあ落ち着けて。まず目覚まし止めたのは俺だしな」

……今すげえ発言したなオイ

アキナは自分の荷物を地面に置いて、ゲンヤと対峙するように立った。ゲンヤはソレを見た後に口を開く

「お前がこれから行く部隊の新人はまったくといっていいほど経験がない。その中でお前は唯一経験のある新人だ。お前がリーダー格じゃねえのは分かってる。だが、そいつらを引っ張ってやってほしい。コレは狸の夢でもある。ぶち壊したくねえんだ。だから頼む」

「ゲンヤさんが頼みを出すなんて珍しい。天変地異の前触れか？」

アキナは冗談交じりに笑う。しかしゲンヤの顔は真剣そのもの。アキナもソレを見てまじめな顔に戻す。

「でも、もちろん全力でやらせてもらおうっすよ」

「ああ………なら、行って来い」

「うス」

アキナはゲンヤの隣を通り過ぎ家を出た。その顔は少し誇らしげな顔。威風堂々、道を歩く。

アキナはうれしかった。多分はじめて、ゲンヤに頼まれた、任されたからだ。

しかしそんな顔は長続きしなかった

俺、ゲンヤさんのせいで遅刻してんじゃん
どーしてくれる。初日から時刻だよクソ野郎

9..12

新人セレモニーを始めて、部隊へのあいさつを終えたんやけど……

「アキナ君、来てないね」

「どうゆうことやろなあ……すでに新人達は顔合わせてる言うのに」

なぜかアキナ君だけ来てへん！まったく！！と、怒るところに通信が。

ゲンヤさんから？

『おう、八神。部隊のほうはどうだ？』

『どうだもクソもまだ始まつとりませんがな。ソレよりゲンヤさん、アキナ君知りません？』

『ん？アキナの奴か？あいつはもうすぐ行くんじゃないか？俺が目覚まし止めといてやったから遅れてるぞ』

『……………』

何しとるんやこの人は……………！！

『ほら、来たみたいだぜ？じゃ、後は頼むわ』

そういつてゲンヤさんは通信を切った。

そして入り口のほうを見てみると長身黒髪が目つき悪い男が走ってきた。

「あ、アキナⅡナカジマ、一等陸士です…今日から、お世話に、な
りま、す……」

「焦らんでええで。事情はゲンヤさんから聞いとる。詳しい話とも
う聞いていると思うから、ほら、向こう行って新人と顔合わせしとき」

「りよ、了解です」

アキナを新人のほうに送り、一息。
一悶着あったにせよこれで全員そろった。本日を持って、機動六課
は始動した。



はあ、なんでこんなに走んなきゃならねえんだろ。
っと、新人はこいつらか。まだ会ったばかりのはずだけど、まあ話
せてはいるみたいだな。さて、ちよつと脅かしてみるかな。主にス
バルとティアナを。

アキナはスバルはもちろん、ティアナとも顔見知りだ。スバルがま
だ候補生のとき、休暇中に街中で会って、それからいろいろの話を
したら、まあ、少なくとも顔見知りにはなっている。話の内容は随
分重かったんだけど、ソレはまたいつか。それ以来ティアナとはい
ろいろメールとかもしてるから、拒絶はされないはず。

そうしてアキナはスバルとティアナの後ろからゆっくり近づいた。
新人4人は円を組むように立っているの、スバルとティアナの二
人の前にいるちびっ子達……たしかエリオとキャロからは丸見えだ。
途中エリオとキャロがこっちに気づいたのだが

（シーー！）

口の前に人差し指を当てて、黙ってろ、のポーズ。

さて、どんな会話をしてるのかな？

「そんな風に呼ばなくていいわよ。堅苦しいからティアナでいいわ」

「私も。そういう呼ばれ方苦手だからスバルでいいよ」

……ティアナも丸くなったなあ

前にあったときはもっと硬かったのに。スバルのあほ丸出しは変わらんが。

「じゃ、じゃあスバルさんとティアナさんで」

「私もソレでお願いします…」

あ、馬鹿。そんなにどもったらばれちまうだろエリオ君。

まあ、バレルのは早いほうがいいか

「どうしたのよエリオ。そんなにどもって」

「い、いえ。何でもありません!!」

ここはエリオに習って…

「じゃ、俺もお前らのことはティアナとスバルって呼ばせてもらうわ」

「「え？」」

二人は同時につぶやき同時にこっち向いた。そのときの顔といった
らもう…笑いが止まらないよ

第2話 始動（後書き）

使用魔法プロテクション（笑）

事実上無能ですねww

まあ、うまく使っていけますけどね

次は新人演習という初戦闘のはず。うまくいけばデバイス出るかもですね。

っていうかこんな書き方でいいのだろうか？

ちよっと不安です（笑

ではまた次回に

感想待ってますね（わら

第3話 結成フォワード陣!! ついでに初訓練!! (前書き)

っと、いうことで今回早速戦闘描写。

難しいよね。アキナさんの魔法については次回やるんで、そんなに
つまらないでください。

でわでわ、どぞー

第3話 結成フワード陣!! ついでに初訓練!!



「「え？」」

このときのあたしの顔はどんなだったんだろう？
久しぶりに会うアイナさんの顔を見てぽっかり口が開いていた気がする。

「あ、アキナさん!!?」

「アキ兄!!」

「二人とも久しぶりだな! 元気だったか？」

「はい!」

「うん!」

実はアキナさんはあたしの兄、ティードと友人だった人で、部隊での兄の話をよく聞かせてもらった。10歳のころに兄に会って魔法のこととか教えてもらっていたらしい。同時に訓練とかも見ていたそうで、今ではあたしの知らない兄のことを知る少ない人の一人だ。初めて会ったときは目つきの悪い不良かと思ったけど、メールなど

をしていくうちに悪い人ではないと分かり、気づけば3年ぐらいメ
ールが続いていた。でも会うことはできなかったので、今回が久し
ぶりの会話だ。

「アキナさんもこの部隊に？」

「ああ。フォワード陣の一人になるらしい」

「やった！！アキ兄とも一緒だ！！」

スバルはアキナさんの腕にしがみついた。

兄弟のじゃれあいもいいけどもう少し周りを気にしてほしいわ……。
エリオとキャロがポカンとしちゃってるじゃない。

「紹介するわね。こちらはスバルの兄に当たる」

「アキナⅡナカジマー一等陸士だ。よろしくな」

「は、はい！エリオⅡモンディアル三等陸士、10歳であります！」

「キャロⅡルⅡルシエ三等陸士、私も10歳であります。それで、
こっちが白竜のフリード」

「きゅるゝっ！」

「俺もなんだかんだで新人だからな。これからよろしく頼むわ」

「「はい！」」

ちびっ子達のいい返事。

実はここで働くのは結構不安だったけど、この部隊ならなんとなくやっていけそうだ。

「んふふふふ」

「あんたはいい加減にしなさい!!」

「フゴッ!!?」

問題はスバル一人ね

第三話

フォワード陣結成!! ついでに初訓練!!

俺は今、エリオと一緒に更衣室にいる。

なんでも、早速オレ達の新人演習が始まるらしい。

今回の教官は高町隊長。エースオブエースに見てもらえるとは、なんと上がるね。

オレ達は着替えながら話をしていた。

「そういえば、エリオはどんな戦闘型なんだ？」

「は、はい! 近代ベルカ式デバイスの近接型であります!」

「そんな堅くなくていいよ。せっかく仲間になったんだ。気楽に行こう。んで? 近代ベルカか……扱いムズク無いか？」

「い、いえ、慣れればそんなでも……ところでアキナさんはどんな？」

「俺? 俺はストレージ。一番扱いやすいからな」

そういつて俺はエリオに自分のデバイスを見せる。

つつても入隊のときに支給された奴をちょっと改造しただけの安物。それに型もかなり古かったりする。ちゃんと整備はしてるけどな。

「ストレージデバイスですか……使い込めますね……」

「まあな……そろそろ行こうか」

「ですね」

あんまり待たせちゃ悪いからな。オレ達は訓練場に向かった。

――――

と、訓練場に着いたわけだが

「「「「広っ!!」」」」

そこは見渡す限りの平面。ドンだけでかいところ使えますか。

「じゃあ準備はいいかな？」

高町隊長が俺らに呼びかける。
俺はうなずこうとしたんだが……

「本当にここでやるんですか？」

「何ありませんよ？」

あゝ

なるほど。空間プログラム使ったことねえのか。

高町隊長はちよつとにやけて

「シャーリー！」

と。するとどこからともなくシャーリーことフィニーノ陸士の声が。

『機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の、陸戦用空間シミュレーター……ステージ、セットアップ！』

すると出てきたのは

巨大な街一つ。

すげえな。ここまででかいのは初めてだ。写メ撮るところ。

ぴろり〜ん♪

うん。いい写真。

「今日から皆には、ここで訓練してもらおうから。頑張ろうね」

「「「はい!!」「」「」」

ここ使えるってのはうれしいな。108部隊のときはボロ屋の前の広場だったからな。たまに本局の訓練場使わせてくれたけど。ゲンヤさんの力不足だなこりゃ。

ゲンヤさん、元気かなー……まあ、多分ギンガに怒られてるんだろ
うけどさ

――――

さーて。今回の敵はどんなのだろうね？

とりあえず俺らは軽い運動をして、アップを済ます。あと一応コー
ルサインの確認とかも。

そんなことをしていると無線から高町隊長の声が

『準備はいいかな？なら早速いってみようか。まずは軽く8体から』

そんな声が聞こえたかと思うと俺らの前に歪な形の機械が。
あれ？これって

「ガジェットツスカ」

『あれ？アキナ君は相手したことあるの？』

お？コレは訓練回避フラグ……

「まあ、部隊で何度か」

『そっかそっか。なら、がんばってみんなを引っ張ってあげて』

じゃなかった。

ちよつとサボれるかも、って思ったんだけどな。

『私達の主な仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理。その目的の為に、これから戦うことになる相手が……これ。自立行動型魔導兵器。コレは近づいたら攻撃してくるタイプね』

俺が相手したことがあるのとは違うみたいだな。

俺が前に相手した奴はなんかへんな触手が出てた近接タイプだった。

『攻撃は鋭いからね。まだ皆には強い相手かもね。じゃあ、早速行こうか。第一回模擬訓練！15分以内にターゲットの捕縛か破壊』

早速か。

皆顔がこわばっている。まあ、得体の知れない相手は怖いよな

『アキナ君は相手を知ってるみたいだから、最初の3分は動いちゃダメだよ。皆の指示も禁止』

マジすか。

『それじゃあ、ミッションスタート!!』

戦いの火蓋は落とされた。



さてさて、ミッションスタートから3分。卓上計算だと既に3体は倒してないときついんだが、いまだ倒した数は2体だ。

まず全員の動きを見ていて思うところがいくつか。ティアナの指示はいい方だが……。まずはソレを言ってからかな。

それと思った以上にAMFがキツイらしい。

AMFってのはアンチマギリンクフィールドっていう、まあいわゆる魔法が聞かない空間のことだ。正確には工夫をすれば攻撃は通る

んだが、こいつらはさっぱりみたいだ。唯一分かってるのは……ティアナぐらいか。

「さーて、俺も動くかな。今から言うこと全員よく聞け！」

そういつて俺も動き出した。全員が俺の声に耳を傾ける。

「まずスバルとエリオ！二人でつぶしにかかるのはいいけど互いに邪魔しあってどうする！！もっと互いに声出せ！そうすりゃ見合うことなんて無くなる！」

俺の声を聞いて互いに顔を見合わせるスバルとエリオ。だからソレがだめっちゅーねん。

「次にキャロ！もっと自信出せ！フォローの仕方は良い！けどちょっと遅いぞ！スバルたちがつつこむ前に補助はかけろ！」

キャロはソレを聞いて少しうつむく。ああ、こりゃ本当に自信ないんだな。フリードが心配しちまってるじゃねえか。

「最後、ティアナ！良いぞ、もっとやれ！！ただ多重弾核は魔力食うから配分に気をつけろ！あとスバルたちの指示は今までどおり任せた！」

ティアナはソレを見て頷いた。よし、コレで大丈夫だろ。多分ギリギリクリアが限界だけだな。

さ、俺も作業に入るかな。……と、その前に

「キャロ！スバルたちに威力強化の魔法かけたらこっち手伝ってくれ！」

「はい！！」

よし、俺のほうもコレで大丈夫だ。あとは皆の実力次第。がんばってくれよう？



「さ、後10分。クリアできるかな？みんなは」

私は一人上空で皆の動きを見守る。はじめ2分は動きが堅かったけど、だんだんスムーズになってきている。アキナ君が戻ってからはどうだろうね？

「皆よく走りますねえ」

「まだまだ危なかしくて、ドキドキだけどね」

そういういつも私の顔はにやけてるんだろな。
だって楽しみで仕方ないもん。教え子が強くなるのは教導官にとって一番うれしいことだから。今回は皆筋がいいからよく伸びるね。きつと。

「データの方はどう？ シャーリー」

「いいのが取れてます。5機ともいい子に仕上がりますよ」

この分なら、5人に凄く合った設定のデバイスが造れそうと。

私はいつか私を超える人が出ればいいなあ……と、思いつつ、皆の様子を見ることに専念した。

アキナ君が戻ってから皆何か言われたみたいで、動きがよくなったね。じゃあ、お手並み拝見。

—
—
—
—
—

どうやらさっき俺が言ったことは効果があったようだ。エリオとスバルははじめよりもいいコンビネーションを見せていて、ティアナも順調。気づけば残りのガジェットは3機。残り時間も4分と言っ

たところだ。

「さて、俺も動こうか。準備はいい？ キャロ」

「は、はい!!」

まだ緊張が抜け気ってねえな。ってかだからこそ俺のほうに寄越したんだけど。

皆のほうにやって失敗を繰り返すのもいいけど、この子は心が弱そうだ。プレッシャーで押しつぶされちゃったら何もできなくなるし、多分。

「目の前に2体がジェットがいるわけだが、1秒でいい。動きを止めることはできるか？」

「は、はい、多分。一つ試してみたいものがあるので」

「ん。了解だ。じゃあ今からきっかり1分後頼むよ。俺の魔法はちよっと難しくてね、詠唱って言うか計算が必要なんだわ」

「分かりました！」

本番はこういうことできねえんだけどな。今回は近づかない限り攻撃してこない。まあ何もやらなけりゃ安全ってわけだ。

っと、早く魔法組み込まないとな……

――――

1分後

「よし！キャロ！頼む！！」

「はい！！」

私は今のところ自信がある魔法で相手を拘束するべく、詠唱を始めた。

「我が求めるは戒めるモノ、捕らえるモノ。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。」

錬鉄召喚“アルケミックチェーン”！！！！」

地面から鎖を召喚。うまい具合にガジェットを絡めとった。だけど2体というのが私にはきつかったのか、一瞬足止めしただけで鎖が解けそうになる。でも、ここで負けるわけには行かない！私は何とか踏ん張って、1秒、たった1秒の隙を作った。

「アキナさん！！」

もう、無理!!
するとアキナさんは

「っはは、すげえじゃねえか……こっちも準備完了だ!!」

その隙を見逃さないよう、胸の前で手を組んだ。
そして相手のほうを向いて手に力をこめた。

すると驚くことに目の前の2体のガジェットは爆発するかのよう
に壊れていった。

「すごい……」

思わずつぶやいた。
何をしたんですか？

そう、聞こうとしたのだが

「あー疲れた」

思った以上に疲れていたみたいで、ぐったりしていた。
今聞くのも野暮なので、後で聞くことにしよう。

そんなことを考えていると

『はい！ミッシェンコンプリート！！皆お疲れ様！！お話があるか

らはじめに集まったところに来てね』

なのはさんの声が。どうやらティアナさん達のほうも終わったみたい。

「アキナさん、行きましようか」

「ん？ああ、そうだな」

私達は皆が待つであろう場所に戻りました。

――――

ああああああ疲れた。

いや、俺はそこまで走ったつもりないんだけどね、どうも使った魔法の負担が大きいらしい。体がぐったり。魔力使いすぎたのかね。でもまさか2回使っただけでここまでなんてなあ……使った魔法？それはまたいつか。

……ん？俺誰にいつてるんだ？

そういえばティアナたちはあれから4体のガジェットを倒した。ティアナのナイス射撃で2体撃破。スバルとエリオのコンビネーションで2体だそうだ。あゝあ、俺も見たかったなあ……。

んで、今なのはさんの話聞いているところだ。呼び方が変わってる理由な？なんか俺は『高町たいちょー』って言ってたんだけどな。スバルが『なのはさん』って呼んだらどっちゃかって言うところちのほうがいいということなんで『なのはさん』って言うことになった。もちろん任務中は違う呼び方にするつもりだけどな。

「——だから、これからがんばっていこうね!!」

「」「」「はい!!」「」「」

なのはさんの言葉に皆でいい返事。訓練って感じだわ。あ、そういえば一個気になってたんだけど

「なのはさん。今回の訓練…ってか模擬戦、評価的には？」

「そうだね…皆良いところもあったけど悪いところもあったからね」

なのはさんの言葉を全員がつばを飲み、待つ。そしてそこで言われたのは

「みんな、全然ダメだね!!!!」

そんな元気よく言わなくても。

第3話 結成フォワード陣!! ついでに初訓練!! (後書き)

そういえば今更だけどアキナの目つき悪いっていう設定なんで入れたんだろう? 正直いらないよね (笑)

当初はこの目つきでちびっ子達に怖がられて……だんだん仲良く……見たいのだったんだけど……
今回のスタンスの『兄弟』から外れる気がしたんですね

ってかなんで今この話してるんだろう W W
次回、デバイス回な気がします (笑)

ああ、主人公デバイス名どうしよう?
誰かアイディアプリーズです W W
守備的な名前にしたいんだけどね……いっそ漢字にしようかな? W W

でわ、次回にまた W W

第4話 アキナの魔法（前書き）

なんつか、フラグびんびん。仕方ないよね。

第4話 アキナの魔法



訓練が終わって静かになった訓練場
そこでは二人分の人影が

「さあ、アキナⅡナカジマ、武器を構えろ」

「うあわ、全力で断りてえ」

マジで訓練と言う名の模擬戦の後にさらに模擬戦とかイジメ以外な
んでもねえ

「ルールは簡単だ。お前が私に一撃入れれば終了。どんな手を使っ
ても構わん。一撃入れるまでは終わらせんぞ」

「いや、入れる前に墜とされっから!!」

「安心しろ。手加減はしてやる」

しかしその顔は明らかに楽しそうな顔。絶対何度もいたぶる気でし
よこの人。

第四話

アキナの魔法

事の発端は訓練後の雑談。

V S ガジェットの後は何度か訓練と言う名の模擬戦をやって皆でクールダウンをしているとなのはさんから話しかけてきた。

「ね、アキナ君。アキナ君はどうやってあのガジェットを破壊したの？ 一見何もやってなかったんだけどさ……」

あー……最初の模擬戦か。

「私も知りたいです！ 近くで見てたけどただ手を合わせただけでドカーンって！！」

そういえばあの後キャロにも聞かれかけたけど集合かかったから言えなかったんだよね

とはいってもたいしたことはやってねえ

「俺がやったのはただのプロテクションっスよ？」

俺がそういうとなのはさんはあはは、と笑いながら疑問の目を向け

てくる。

「嘘でしょ？だってプロテクションはあくまで身を守るもの。私にはちょっと爆発できるようなには思えないな」

確かに。プロテクションは攻撃魔法ではなく列記とした防御魔法。そういえば前に師匠から聞いたつけ、なのはさんはプロテクションがうまかったって。

でも甘いつすよなのはさん

「まあ、そうっスね。プロテクションは防御魔法だから爆発させたりする効果は無いっス」

ん……気づいたら皆聞いてんじゃねえか恥ずかしい

「ただ、ソレも使いよう、ってことですよ。なのはさん、六課のメンバー資料見ましたよね？」

「うん。アキナ君のところもちゃんと見たよ。使用魔法がプロテクションって書いてあって驚いたもの」

「つまりそういうことっす。プロテクションは俺の得意魔法。派生の仕方も熟知してるんすよ」

得意魔法って言うよりはこれ以外ほとんど使えないんだけどな。

射撃魔法をしようと思ったけどうまく魔法弾を生成できないし、ましてやスバルみたいに自分の拳に魔力を集めて威力を倍増……とかもできねえ。

できたのは確か……一部のバインドと、プロテクション、あとは回復魔法ぐらいか。

RPGとかだったら完璧にフルバックのサポートタイプなんだよな。まあ、一応近接の対応としてギンガから無理やり覚えさせられた「シューティングアーツ」とゲンヤサンに言われて覚えたベルカ式の剣型デバイスぐらいは使える。もっとも、威力の付加とかはできないからただの殴り合いとチャンバラみたいなものだけだな。

「へえ……すごいね。で、結局あの時は何をやったのかな？」

あ、説明忘れてたわ

「そうっすね……俺は口で説明とか苦手なんで実践で説明しますわ」

と、言うことで俺は立ち上がって、よく見てくださいねーと言った。全員の視線が集まる。あー…無駄な緊張

「まず、俺はキャラにガジェットの足止めさせましたよね？あれは実は座標計算してたんスよ」

「座標？」

「はい。ンで、座標を求めたら、今度はその場所に、コレを形成したんッス。コレはプロテクションを組み合わせたものッス」

俺はそういうと手のひらに三角錐の形をした緑色の物を形成。

ちっさいからよく分からねえかもしれねえけど、実はコレもプロテクションを組み合わせたもの。

「そのときはガジェットの中にコレを形成したんすよ。んで、このちっさいプロテクションを……」

俺はその場でプロテクションに向かって魔力をこめる。そして

「「「「「おお」」」」」」

一気にでっかくした。

全員から歓声の声が。うれしいね、割と。だがスバル、お前は知ってただろうが。

「こう、でっかくしたんす。確かにガジェットの装甲は堅いかもしれねえっすけど、中はコードとかの固まりだと思ったんで。あと、ガジェットは実は魔力で動いてるって聞いたことあったんで、内部までAFMは作動しないと考えた結果、これがいんじゃないかな、と」

俺は一気に説明を終えて、なのはさんの顔を見た。なんともいえぬ

表情である。どゆこと

「……すごいね。私そんな事考え付かなかったよ」

っはっはー！さすが俺。

なのはさんは

「なるほど。……これはもうちょっと練習メニュー考え直さなきゃかな……」

と、つぶやいたところで俺に向かった。

「うん、アキナ君の魔法は分かったよ。私は実はなんか別の魔法を使ってたかと思ったんだけど、本当にプロテクションだったんだね」

「あったりめえっす」

「でね？ちょっと気になったんだけど、耐久力のほうはどうなのかな？」

「耐久力っすか……まあそれなりに自信はありますけど……」

これでも得意魔法だからな。

「そっかそっか……うん。アキナ君の訓練はとりあえずその魔法を極めようかな」

コレを聞いたなのはさんはトンでも発言をした。

「ね、ちょっと耐久力知りたいからさ、模擬戦しよっか」

はい？

はいいいいいいいいいい！！！！？

「何言ってるんすか！！？訓練のあとっすよ！！？この状態でなのはさんと戦ったらさすがに死にますよって！」

こんなことやったら絶対命が持たない。聞いた話じゃなのはさんは『白い悪魔』って呼ばれてるらしいじゃねえか。なんでも模擬戦で気に入った人にはSBLって。SLBが何なのかしらねえがヤバイ気がするんだ。

しかし、なのはさんは

「平気だよ。私がやるわけじゃないから」

と。

なら誰がやるんだ？と思っていいたら通信で

「シグナム副隊長いますか？」

おいおいおいおいおいおいおい！！
ちよっと待て！！

シグナム副隊長って言ったらあのバトル狂で有名な人じゃねえか！
！ある意味なのはさんよりたち悪いじゃねえか！！

『ああ、今ならあいてる。どうした？』

「すみません、ちよっとバトルデータを取りたいんですけど今日ヴ
イータちゃんお休みで」

『ああ、なるほど。久しぶりの模擬戦か。腕が鳴るな、5分待って
ろ。すぐ行く』

「おねがいしますね」

あはは、俺終わった気がするよ。
なあどうしたら良いんだ？スバル？

「ッ！？
」

なぜか全員に目を背けられた。っは！コレは死んだわ
どーしろちゅうねん

「遅れたな！！
」

しかもシグナムさん早いし。3分経ってねえよ

「なんだ？模擬戦するのはこの新人か？」

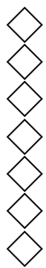
「はい、よろしく願いしますね。なるべく一撃で沈めないように
お願いします」

「承知した」

勝手に話し進めないでください。

「では行くぞ新人！」

あっはは、体かひきづられていくよー
ってかなのはさん、何すかその笑顔。



「ぐへええええ……」

「あの、大丈夫ですか？アキナさん」

「なんとかな。初日からこんな疲れて…しかも明日早朝訓練もある
じゃねえか」

今はエリオと一緒に大浴場にいる。一日の疲れが取れるつつうか体
ごと流されそうだわ。

まあ、結局シグナム副隊長との模擬戦は瞬殺されました。

一回目の連撃は何かしのいだんだけどな……その後の紫電一閃に
やられた……

ってかなんなんだあの方は……一撃が異常に重い！！

「でも凄かったですよ!?!あの連撃を防ぎきるなんて!しかもあの後カウンターも入れてたし……」

「あれなー。ちょっとずるしたんだけどな」

「え?」

「ほら、剣筋には角度があるだろ?副隊長の一撃は異常に重かったからな。悪いがいなさせてもらった」

まあ、剣の一撃を何度も真正面から受けてたらすぐに壊れちまうかな

「エリオも覚えときな。いなす技は敵との隙を作りやすいから便利だぞ」

「は、はい!!」

結局カウンターは入らないし、拳句の果て「やるじゃないか……」とか言っただけで全力でこられるし。さすがに無理だわ……だめだ、早く寝たい。

「……はあ……。エリオ、俺そろそろ上がるわ」

「あ、はい!」

「のぼせるなよー」

俺は先に上がって、エリオを待つことにした。
つつても同じタイミングで入ったんだからすぐ出るだろ。

暑くてなんともいえない湿度の脱衣所を出るべくさっさと着替えて、
外にあるベンチでエリオを待つ。
その間に自分の相棒、音楽プレイヤーを起動させてイヤホンを耳に
つつこんだ。

聞きなれた曲は自分の精神をゆっくり揺さぶり

「んが……………」

俺はべゆっくり目を閉じた。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

ん？なんか聞こえるな

「…………ぎだ。出力200」

「は…」

「はんの…滅。じっ…………よ」

「くそ、つぎ……持ってこい」

「…………りょうか…………」

なんだこれ？言葉はぶちぶちだし、言ってる内容も意味不明。
だがなんだかなあ…………聞き覚えがあるな、この声。なんつうか、背
中がぞっとするが。

思い出そうと思うが…………わからねえ。

「……………ん」

あ？今度は何だよ？

「アキ……………さん」

あれ？

「アキナさん！！」

— — — — —

「うお!!?」

「もう、ここで寝てると風邪引きますよ?」

いっけねえ、寝てみたいだわ。

「どうしました?」

「ん……いや、なんでもねえ。さっさと飯食いに行こうぜ。んで寝よう」

「ですね」

エリオにまで心配かけるわけには行かないな。ま、疲れが出たんだろ。早く飯食いに行こう。

そしてオレ達はそのまま食堂へ向かった。
そこには既に俺ら以外全員そろっていて

「アキ兄遅いよ!!」

「アキナさん……」

「エリオ君遅いよ」

と。

「悪い悪い!遅くなった」

そういつて席に着く。すでに飯は用意されていて

「「「「「いったきまーす!」「」「」「」

全員でかぶりついた。

つってもなんだろうね、あの夢。へんに覚えてるし。
どこか懐かしい気もしたけど……

まあ、いいか

第4話 アキナの魔法（後書き）

次回デバイス登場、なはず！

あ、魔法のことで分からなかったら言ってください！解説回作ります！

でわでわ！まあ今度！

第5話 ある朝の風景（前書き）

閑話休題、みたいな。

正直内容ありません（笑

重大なお知らせ！！

小説の名前を変更！！

ある人気小説と名前が酷似していることが判明！！
ということ

「ある守護者の話。」

に変更です！！

第5話 ある朝の風景



新暦75年 5月

部隊が成立してすでに二週間が経つ。

部隊のフォワード陣は日々の訓練を欠かさず続け、着々と実力をつけていっている。

「言い残すことは？」

「ああ、一度で良いから高級な肉を食ってみたかった」

約一人を除いて。

「てっめえ!!! 今日で何回目の遅刻だコラ! アキナ! 聞いてんのか!!!」

「え? ああ、聞いてますよ。確かどこかの国がTPP加盟について討論してて………」

「何の話だ馬鹿!!!! いい加減目を覚ませ!!!!」

「ああ、は……い。……………すー…」

「…………アイゼン」

《…………R a k e t e n h a m m e r》

ゴキュッ！！！！

「ふいっ！！？」

今日もいい天気である。

————————

訓練場の端っこ

早朝訓練を終えたフォワード陣は訓練後のクールダウンをしているところだ。

今日の訓練はいつもの基礎体力に追加してガジェットとの模擬戦、そして隊長との模擬戦もあったりでかなり大変だった。

一方訓練場の真ん中

大きく身長差がある二人の人間が1on1の模擬戦をやっている。

「今日で何日目だっけ？ ティア？ 4日連続？」

「5日よ」

「アキ兄も飽きないねえ……よく毎日遅刻してヴィータ副隊長との
1on1の模擬戦を選ぶよ」

「いや、アキナさんは選んでるんじゃないやなくて不可抗力だから」

この光景を見るのももう5日連続かー。すごいねえ……

アキ兄は現在早朝訓練の遅刻の罰としてヴィータ副隊長との模擬戦
をしている。

それもコレで5日連続。

アキ兄はもともと朝起きるのが苦手な人で、昔から朝起きるのが遅
かった。起きてもぼーっとしていることが多くて、ギン姉に叩かれ
ることもしばしばだった。既に訓練が開始して2週間。はじめの3
日あたりは私達が起こしに行ってたんだけど、私達も連続の早朝訓
練に疲れてたつてのもあって起こしにいけないってしまったんだ。
そのあと1週間ぐらいは何とかアキ兄も自力で起きてきた。もちろ
んギリギリで。でも、最近は起きることができなくて、毎日のよう
に遅れてきてペナルティとして模擬戦をしている。そのせいか、ア

キナさんはどんどん上達していて

「それにしてもさ、アキナさん、よくヴィータ副隊長の攻撃捌けるわよね」

「そうですね。僕達だとすぐ墜とされちゃうのに……」

気づけばフォワード陣で段突強いレベルにはなってると思う。

もちろん、もともとアキ兄が一番強かったんだけど最近ずば抜けてきてる。

「はあ……あたしも遅れてこようかなあ……」

「ティア!!? 何言ってるの!!?」

「そうですよティアナさん!! あんなのに出たら死んじゃいますよ!!」

「キュク……ッ!!」

キャロとフリードもそう思うよね!!? だってほら、

「ラケーテンハンマー!!!!!!」

「へぶっ!!!?」

アキ兄吹っ飛んだよ?



ああ、クソ
ひでえめにあった

「オイ、アキナ!! コレに懲りたら次は遅刻なんてするんじゃないぞ」

「へーい」

アキナは適当な返事をしておく。

って、このやり取りもう5回ぐらいやってるんだよな。

連日の疲れに加えて昨日やったデスクワーク。そのせいで今日も寝れた時間が3時間だ。こんなじゃあ遅刻もしちまうんだよな。

ま、正直この模擬戦かなり為になるんだよな。最近プロテクショ

ンの耐久力が上がったのか、ヴィータ副隊長の攻撃も1発程度じゃ壊れなくなってきた。

プロテクションの派生もまた新しく作れそうだし、明日はコレで行くか。って、すでに明日遅れること前提でどうする！俺！！

正直普通の早朝訓練よりハードな気がするぜ……ヴィータ副隊長殺す気で来てるし。

「さーってと、戻るか」

そういつてスバルたちがいる訓練場の端っこに戻ろうと、歩く。前方を見るとスバルが何かを叫んでいる。

「ア……イー！！……から……出……る！！」

「何だー！！！！」

何も聞こえないので、とりあえず叫んでおく。

とはいっても急ぎのようだったら大変なので走って向かう。と、そこで気づく。

ん？なんか焦げ臭くね？

「アキ兄！！デバイスから火が出てる！！！！」

「なんだって！！？」

急いで自分のデバイスを見てみると

「うお！マジで燃えてるし！！」

火花を散らし、黒い煙が昇っている。
思わず体から引き離し、地面に置く。そして次の瞬間には

ボン！！

あらら、木端微塵だわ……
跡形もなく碎け散ってしまった。

「どーすんだこれ？」

第五話

ある朝の風景

ついにイカれました俺のデバイス。

まあかなり古いタイプだから仕方なかったのかも知れねえけど。あとついでにティアナとスバルのデバイスもアウト。むしろ自作デバイスでよく持った。

とまあそんなことを話してたら

「うーん、皆訓練にも慣れてきたし……そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ？」

と

「なのはさん。ってことは俺らのデバイス全とつかえっすか？」

「うん。3人のは特に。それ以上無茶させると逆に自分が危ないからね」

だ、そうで、全員のデバイスを取り替えるらしい。

デバイスって結構高価なものなんだけども……さすが部隊。

「じゃあ、一旦寮に戻ってシャワーを浴びてから、ロビーに集合しようか」

「「「「はい！」「」「」」

ということで俺らは隊舎のほうへ……と思ったんだけど

「なんだあの黒い車……めっちゃカッコエじゃん」

ありえないほどイカした黒いスポーツカーが走ってきた。

やばいな……あれはやべえ……あれに乗ってる奴はセンスがヤバイ。俺と気が合いそうだ」

「ソレはありがとう」

「いえいえ……ってハラOWN隊長!!?」

気づいたらハラOWN隊長が目の前に。なんで!!??

「とうかありがとうとは?」

「ん?さっきの途中から声に出てたよ?」

マジか! 恥ずかしい

「で、これハラOWN隊長の車だったんですね」

「うん。地上での移動手段なんだ」

「すげえなあ……やっぱ、高いンすかね?」

「え?値段……そこまでじゃないよ。これぐらい」

そうってハラOWN隊長は俺に耳打ちした。
!!!?? 驚愕のお値段

「ね？ そんな大した額じゃないでしょ？」

「何言ってるんすか！！？ 一般局員がどうあがいても買えねー値段じゃないっすか！！」

「え？ あれ？」

焦りだすハラOWN隊長。

あんた金銭感覚ずれてるよ、絶対。

「そういえばエリオたちはコレ乗ったことあるのか？」

「はい！ 一度だけです」

「どうだった？」

エリオとキャロが「どんなだった？」とか「中は…」とか話してる。これで乗り心地最高、シートふかふかなら俺無理してでも買うわ。ゲンヤさんに金を借りてでも買う。

「ええつとですね……言いにくいんですけど…言わなきゃダメですか？」

え！！？ まさか……そんなに良くないとか？ 実は外装だけのぼった

くりだったとか!!?」

エリオとキャロはもじもじしている。そんなに……酷いのか？
とか思ってたんだけどな。さすがハラオウン隊長の秘蔵っ子

「えっと、ですね、言いにくいんですけど……」

ごくり、と俺はつばを飲む。

「フェイトさんの、においがしました……」

顔を真っ赤にするエリオたち。
照れ照れなハラウン隊長。

………微笑ましいね。

「そっかそっか。そりゃ最高の車だな」

俺はできる限りの笑顔を送り、二人の頭をなでた。二人は恥ずかしそうにうつむく。

何だこの理想の家庭は。

まあ戦闘に出てたりする時点で普通の家庭じゃないけどね。
それでも、この家庭はいい家庭だわ。

「じゃあ、そろそろロビーに戻ろうか。なのはさん、先ロビーで待ってます」

「あ、うん。シャワー浴びて待ってて!!」

「ういっす」

他の皆を見渡す。

「そうね」

「だね」

「そうしましょう」

「はい!」

「きゅくる〜!」

いや、心も癒されたし。なのはさんはフェイトさんと話してるし。そうして俺らは隊舎の方へ向かった。

そのとき誰か見えた気がするけど……気のせい……だよな？

「あのさ、私は？ 私もいたんやけど………」



「じゃ、あとでな」

「うん」

隊舎のシャワールームで別れるオレ達。年齢的にはエリオも女子用に入れるがさすがに嫌だそうで。キャロはすげえ入れたがってたけどな。ってか個室シャワーなのに一緒に入ってどうするつもりだったんだよ。

「さて、今日も疲れたなあ……」

「今日もって……まだ早朝訓練だけですよ？ しかもアキナさんソレも遅れてきたじゃないですか」

うぐっ

確かに俺はこいつらよりも短い訓練なんだよな。まあヴィータ副隊長とのサシはキツイけどな。確か今日エリオたちは高町隊長とやってるはず。つっても5 on 2だ。時間かかろうと隙はあるだろ。……相手はエースオブエースだけだ。

さて、ここから10分は無言になる。理由は簡単だ。

体を洗い終わった二人はすぐに更衣室に向かい、ちゃっちゃと着替えた。

「シャワールームってさ、暑いよな」

「はい……。僕もこういうの苦手なんですよね……。髪が纏わり付くっていうか……」

「それな」

俺らはどうも暑いところが苦手らしい。ってか男の大半はそうなんじゃないか？ 蒸れると禿げるって聞いたこともあるし、早く出ておいて損はない。

ん？ 禿げに気を使うって……おっさんか俺は！！ まだピチピチの1

7だよ!!!

シャワールームに入ってから出るまで10分か……まあまあの結果だな。更衣室から出るも、さすがに女子勢はまだ出ていないようだ。

「しかたねえ……暇つぶしてるか」

俺はそういうと懷から音楽プレイヤーを出す。

それをエリオは興味津々の顔で見ている。こういうの見たことないのだろうか？

「アキナさん……それ、この間も出してましたけど何なんですか？」

「これか？これはな……って、説明するより実感したほうが早いか。こっちきな」

そういつて俺はエリオをそばに寄せる。
そしてイヤホンの片方を渡した。

「??.?」

「こうするんだ」

エリオに見せるように耳にあてがう。

まだ電源は入れていないので何も聞こえない。エリオも同じように耳に入れた。

さ、どんな音楽にしようかな？

いきなりRock聞かせてもうるさいだけだし、かといってクラシックなど聞かせるわけにも行かない。ってか俺のやつに入ってない。

まあ、悩んでも仕方ないからとりあえずお気に入りの曲を流す。ロックバンドなはずだけど静かな曲だ。『Trust your Heart』って曲。

「わ!!」

いきなり音が鳴ったのでエリオは驚いたようだ。

「どうだ？音楽が聞こえるだろ？」

「はい。驚きましたけど……これ、いい歌ですね」

「だろ？」

どうやらエリオも気に入ってくれたみたいだ。

「ならコレならどうだ？」

次に選んだのはガチRock。

ドラムの音がかっこいいよな。ただ慣れるまでは耳がいてえ…

驚かせるのが前提なので、音量最大。

音漏れ迷惑もいいところな音量。俺もこんな音量めったに出さない…ってぐらいの音量。

そしてポチッと。

ズギヤギヤギヤギヤギヤ!!!

「うわわわ!!! ちょ!!! 音量が!!!!!!」

ですよー



一方女性陣

「ったく、アキナさんは訓練する気あるのかしら？」

「まあまあ。変わりにヴィータ副隊長とやってるじゃん」

「たぶんあっちのほうがきついですよ？」

シャワーを浴びているティアナ、スバル、キャロの三人。

女性というのはなんともシャワーがすきなのか、実はすでに10分たっていたりする。

そういえば、とキャロは口を開いた。

「アキナさんって、六課に来る前は部隊にいたんですよね？」

「そうだよ。ギン姉とおんなじ部隊だったはず」

「やっぱり、強かったんですかね？」

スバルは「どうだったかなー」と唸っている。

しかし何かを思い出したのか、手をぼんと叩いた。

「そうそう！強いとかそんなレベルじゃないよ！！」

「……え？ソレって？」

キャロはきょとんとした顔でスバルの方を向いた。

「強いとかじゃなく、逆！ほとんど失敗してるよ！！って、ソレは初めのほうだけだけど。ギン姉に聞いた話だとね、『与えられた仕事の7割は失敗するダメ局員』だったらしいよ？」

「ほんとですか!!?」

うそ、ありえないよ?とキャラは唸る。

現在六課のフォワード陣の中で一番の実力者は、ときかれれば誰もが「アキナ」と答えるほどに強いからだ。もちろん隊長達には遠く及ばないだろうが、アキナの実力はかなりのものだろう。そんな人が『仕事ができないわけがない』、キャラはそう思っていた。

しかも話を聞いていくと一ヶ月に与えられた任務（新人演習を含む）15個のうち11個は失敗、2個は誰かの助けを持って完了、となっていたらしい。残りの成功した2つの任務はデスクワークと、基礎体力総合訓練だったとか。

キャラはで呆然としていた。

そんなところに話を聞いていたティアナが補足する。

「でもね、配属されて2ヶ月ぐらいのときに一気に成功するようになったんだって。あたしはそのときメールで「どうしていきなりできるようになったの?」って聞いたんだけど、そしたら『師匠がすごくなった』って帰ってきたの」

「師匠?」

「そ。ソレが誰かは教えてくれなかったけど、『その人のおかげで今の俺がある。』だって。そのあとこっちに異動するまで4ヶ月ぐらいあったんだけど、そのうちの9割を完全成功に収めて、その功績で表彰も何度か。たった半年で一等陸士になったのはアキナさんが始めてらしいわ」

「へえー……すごいなあ……」

「でもどうしていきなりそんなことを？」

「私、アキナさんのような人になりたいんです！皆を守れるような、強い人に！」

スバルとティアナはソレを聞いて少し面食らった顔になり、キャロは目を輝かせた。そしてその後しばし感傷に浸った。スバル（後日談）によると、ずっとぶつぶついていた、後輩がとても心配になった、だそうだ。

そのころ後ろでは「ティアアキ兄のこと詳しいねえ……」「う、うっさいわよ、普通よ普通！」「顔赤いよお？」「あ、暑いからよ！」「とか飛び交っていたそうで、スバルは終始ニヤけ、ティアナは顔が赤かった。

三人はそんなことを話しながら、シャワー室から出て行った。更衣室にいる間はなぜか恋バナになったが、乙女の事情ということで割愛。キャロいわく、ティアナさんが……。

そして更衣室から出た女性たち三人は、出て正面の光景を見てそれぞれつぶやいた。

「キャロ、あんな風になっちゃダメよ」

「アキ兄はだめだ。あとエリオも」

「……………（泣）」

視線の先にはエアギターを豪快に披露するアキナとエリオの姿があったとかなかったとか。

第5話 ある朝の風景（後書き）

感想くれた方々！！ありがとうございます！

いろいろ直してきます！今後ともよろしく願いします！

ってかデバイスが出ない！！くそう！！

まあ、ほのぼのが目標でした。

……今度からちゃんとプロット立てて書こうかな？

あと「Side」っていう視点切り替えもやったほうが良いですかね？

あ、あとそろそろキャラ紹介の回を作るかもです。まあそれは流しても構いません。多分そのときにアキナVSヴィータがかかれる気が（笑

でわでわ

次回に！！

感想とか待ってますw。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣（前書き）

どもも、こーこーせいです。

なんだかんだでもうファーストアラートです。

あと前話がいろいろひどかったので直します。たぶん。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣



「わぁ……」

「コレがあたし達の…新デバイス…ですか？」

「すげえな、こりゃ」

「そうでーす！設計主任私！協力者、なのはさんとフェイトさんと
レイジングハートさんとリイン曹長！」

いや、レイジングハートっておかしくね。あれデバイスじゃんよ。
今オレ達は六課内のデバイスルームにいる。今回新デバイスをもら
えるということでやってきたのだ。その通り、目の前には各自のデ
バイスがある。

ティアナの前にはカード
スバルの前にはペンダント

大きく変わったのはこの二人かな。

エリオの前には腕時計
キャロの前にはリストのアクセサリー

そして俺の前
これから相棒になるであろうデバイス。ピアスの形をしている。

リイン曹長によると、外見に変化がなくとも中身はほとんど違うってさ。

エリオとキャロは目が点だった。

「皆が使うことになるのは、六課の前線メンバーとメカニックスタッフの技術と経験を集めた最新型！部隊の目的に合わせて、そして皆の個性に合わせて作られた文句なしの最高の期待です！」

リイン曹長が頭の上で飛び回る。

そして自分のデバイスを引き寄せた。

「この子達は皆、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いがこめられていっぱい時間をかけてやっと完成したです！！！」

リイン曹長が全員にデバイスを渡す。

……言うタイミングじゃあねえがどうやって動かしてんだろ？

「ただの道具や武器と思わないで、大切に、だけど性能の限界まで前回で使ってほしいです！！！」

全員がその言葉にうなづく。

この中じゃ誰も道具だなんて思っていないだろう。むしろ仲間と思ってるはずだ。仲間をないがしろにしちゃいけないよな。

「この子達もきつとソレを望んでるから」

まあ、どんなに壊れてもシャーリーさんは嬉々して修理するんだろ
うなあ……

まあ、壊す気なんかねえけど。

そんなことをしていると、後ろからなのはさんが

「ごめんごめん、遅くなって」

「なのはさん!!」

リイン曹長がすつと寄っていく。

「ナイスタイミングです! ちょうど今から機能説明をしようかと!
!」

「そっか。間に合ってよかった。もう既に使える状態なんだよね?」

ん? この言葉はデバイスの説明が終わったらすぐに訓練って言うこ
とですかな?

キッツいわあ……。

第6話

ファーストアラート

さてさて、機能説明が終わったわけですが、驚愕の事実判明。

っと、ソレを言う前にいろいろ説明からだな。

まず俺らのデバイスは機能制限がされてて、訓練や、実力に合わせて解除していくらしい。それがどんな風に換わるかは教えてくれませんでした。まあ、楽しみは取っておいたほうがいいのかも知れねえけど。

ちなみにそれ以外は前と一緒に。ってかむしろ強くなってるらしい。

でなでな、驚愕の事実はこの時から。

隊長、副隊長はデバイスだけじゃなくて自身の体にもリミッターかけてたらしい。そんな状態で俺らの相手してたとか……。

俺ヴィータ副隊長との模擬戦いけんじゃね？とか思ってたけどそんなことはなかった。本気出してなかったよ。

リミッターかける理由は部隊の魔力保有量をあわせる為らしい。部

隊の設立にはある程度の規約があつて、そのなかに魔力の総保有量も入っている。化け物じみた部隊が立ち上がる理由が分かった。ゲンヤサンに渡された資料を見たときおかしいと思つてたけどそーゆーことだったのね。リミッターをかけなきゃいけない部隊なんて前代未聞だろう。

話はシャーリーさんに戻る。

「あと、このデバイスたちは皆の訓練データを元に調整してあるからいきなり使っても違和感ないはずだよ」

「午後の訓練でテストして微調節しようね」

だってよ。どうする？俺、どうすんのよ！！

俺訓練参加してねえじゃん。特に朝。データ取れてんのかね？

「アキナ君はデータが少なかったから……っていうか元のデバイスも壊れちゃったから使いにくいかも。あと、インテリジェントデバイスに切り替えたからそこいらへんも午後の訓練で慣れてね」

今日こそまじめに訓練出ればよかったと思うときは無いね。
ん？そういえば

「なのはさん、俺のデバイスって名前何なんスか？」

「名前……アキナ君のは特に決まっていんだよね。自分で決めて良いよ？呼びやすい奴にしてあげてね？」

「マジすか」

名前か……どうしよっかなあ……

俺って魔法とかを参考にしたくても使える魔法がほぼ0だし……うーん？

（スバルさん、アキナさんが難しい顔してますよ！助けてあげてください、妹として！！）

（いやいや、エリオ。ここは見守るべきだよ。アキ兄のことだからきっと最高（に面白そう）な名前考えるはずだよ！！）

おーい、そこ、聞こえてるぞコラア

ついでにスバル。副音声も聞こえてる。面白って何だ面白いって。

っと、いい加減考えるか。

俺自体が弱いからな……せめてこっちだけでも強くしてやろう。

「よっしゃ！名前『ガードビーツ』にしよう！」

理由？

結局は直感だ。こういうときは直感というものがいい。どんなものも結局はじっくり来るもんだ。気に入らなくなっても自己責任だしな。

（つまらないね、エリオ）

（え？ かつこいいと思いましたけど！？）

よし、あとでスバルお仕置きな。エリオ、ありがとう。あとでこの間手に入れた新曲聞かせてやる。つかお前ら聞こえてるって。学習しろよ。

っと、そんなことをしてるとなのはさんがやってきた。

「そういえばアキナ君に言いたいことがあったんだ」

「？ なんすかね？？？」

「今回アキナ君のデバイスには新しく『カートリッジシステム』を搭載してみたの」

「カートリッジシステム……スカ」

「うん」

カートリッジシステムというのは圧縮魔力を込めたカートリッジを

ロードすることで、瞬時に爆発的な魔力を得る技術だ。かなり強力ではあるが、体への負担は計り知れない。
ってかなんで俺に？

「アキナ君の魔法を全部知ってるわけじゃないんだけど……魔法の性質上、アキナ君は遊撃要員としておこうと思ってるの。だから先頭に出たり、後ろに回ったり大変になるんだけど……」

遊撃、ねえ……
っておい！

「ちょっと待て！！？なんだそのポジション！！？俺そんな大変な場所なんて聞いてねえぞ！！？何で俺が！！？」

その問いにはティアナが答えた。

「アキナさん、今日の訓練参加してませんでしたよね？そのときに決まったんです」

ポジションって大事だろうが。人のないところで決めるんじゃないか。ねえ。なのはさんは苦笑しつつ、話を続けた。

「でね？いざって時に魔力切れだと大変でしょ？だからつけたの。けどあまり多用するのはダメだよ？体の負担が大きいから………
……私みたいになっちゃう」

ん？最後なんか言ったか？
なのはさんは苦虫をつぶしたような顔だ。カートリッジシステムで何かあったのか？

「まあ、どちらにせよ、無茶はしちゃだめだよ？」

「うす」

でもカートリッジシステムか……いいね。使ってみてえ。
しばらくは体が頑丈なスバルに使うか」

「アキ兄、声に出てる」

「まじか！！？なんか最近こんなの多いなあ……」

「年じゃないの〜？」

「んだとコラ！？」

「ほら、すぐ怒る！！こうねんきしょーがいだー！！」

スバルの言葉に全員がどっと笑った。
くそう。今日の訓練で泣かしてやる。

そんな和やかなムードの中、ひととき目立つ音と、ランプが点滅。
モニターには「ALERT」の文字。

全員の顔がこわばった。
この音は一級警戒態勢じゃねえか。全員が押し黙る。仕事の匂いだな。

「グリフィス君!!」

なのはさんが声を出すとモニターが出てきた。

『はい！教会本部から出動要請です』

『なのは隊長！フェイト隊長！グリフィス君！こちらはやて！』

二つのモニター。

一つはロウラン准尉。

一つは我が部隊長、八神部隊長だ。てかフェイト隊長ってことはハラウン隊長も聞いているのか。

『状況は？』

……噂をすれば？かな

『教会の調査団が追っていたレリックらしき物が見つかった。場所は、エイリの山岳丘陵地区。目標は、山岳リニアールで移動中』

『移動中って……』

「まさか！」

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのおかげで、リニアール』

ルのコントロールが奪われてる。リニアレール車内のガジェットは、最低でも30体。大型や飛行型の未確認のタイプが出てるかも知れへん。いきなりハードは初出動や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いける?』

『私は、いつでも』

「私も!」

隊長たちは当然かのごとくうなづく。
部隊長の視線は俺らに。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、アキナ。皆もOKか?』

「「「はい!」」」

「うす!」

初仕事だ。気合入れてかねえと。

『いいお返事や。シフトはA・3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制!』

「はい」

『なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮』

「うん！」

八神部隊長は一息置いて、言い放つ。

『ほんなら、機動六課フォワード部隊………出動！』

俺らの初仕事は口火を切られた。

第6話 ファーストアラート。初陣フォワード陣（後書き）

と、いうことでデバイスの名前は『ガードビーツ』です

ガードは魔法にかけましたけど、ビーツは割りと適当（笑

デバイスの性格とかは実はまだ何もW

ちやんと考えて行きます

ファーストアラートが終わったら一回休憩。

キャラ説明入れますねゝ

では、また次回。

感想待ってますゝ

第7話 星と雷と風（前書き）

分隊名は勝手に命名。

あとまだデバイスの意味はない気がします（わら

では、どぞ

第7話 星と雷と風



出動命令を受けた俺達は、すぐさま輸送ヘリに乗り込んだ。フォワード陣は席に座り、正面になのはさんが立つ。早速ミーティングだ。

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね」

「はい！」

「がんばります！」

ティアナとスバルの返事。

「エリオとキャロ、それからフリードもしっかりですよ！！」

「「はい！」」

「きゅく〜っ！」

ちびっ子達の返事。

「危ないときには私やフェイト隊長、リインがフォローするから。おっかなびっくりじゃなくって思いっきりやってみよう！！」

「「「はい」「」「」」

全員の返事。

あれー、俺には個別の確認ないのかい。まあ、返事とかはしたが。

今回、俺は遊撃部隊として動く。コードネームは風。^{エア}
ティアナとスバルは星、^{スターズ}エリオとキャロ、フリードは雷だ。^{ライティング}隊長は
それぞれなのはさんとハラOWN隊長。俺には隊長などいないため
基本的には自由に動ける。だが判断力が試されるため、今回はかな
り緊張している。横を見るとなぜか余裕そうな顔が並んでいた。
一人を除いて。

(どうした、キャロ)

俺は小声で話しかけた。

(い、いえ、ごめんなさい。大丈夫です)

んなわけあるか。どう見ても押しつぶされそうな顔だ。エリオとフ
リードも不安そうな顔になっちまってる。

まあ、本人が大丈夫だというのだから深く付け入ることはできない。
しかたないので俺はキャロのことを頭の隅に置きながら今回の任務
のシミュレーションをはじめた。

第7話

星と雷と風



ん？気づけばもうポイントじゃねえか。

シミュレーションをしているうちに現場に着いたらしい。まあ、シミュレーションはできたかな。実はシミュレーションというものはとても大事で、コレがあるかないかで成果が変わるらしい。

俺もそう思うので仕事前は絶対にやっておくのだが、コレをいったのがパチンコを打ちに行く直前のゲンヤさんの言葉だと思うと、何か切ない。

さつき入った

『ガジェット反応、空から！？』

『現地航空観測隊、反応を多数確認！』

という通信によると、空にもガジェットが着ているとのこと。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を抑える！」

「うっす。なのはさん、お願いします」

どうやらなのはさんはここで降りるらしい。
ヘリのハッチが開き、風が流れる。

「じゃ、ちょっと出てくるけど。皆もがんばって、ズバツとやっつけちゃおう！」

「」「はい！」「」

「はい…」

俺らは返事をしたが一人だけ返事が遅れた奴がいた。
無論、キャロだ。まだ不安なのか、顔はこわばり少しくつむいている。

そんなキャロになのはさんは近づく。

「……大丈夫。離れていても、通信で繋がってる。一人じゃないから、ピンチの時は助け合える。キャロの魔法は、皆を助けてあげられる、優しくて強い魔法なんだから」

「あ……」

その言葉でキャロの表情は少し明るくなる。どうやら少し緊張が解けたようだ。
さすがなのはさん。

「じゃあ、私も行くね。現場の判断はティアナとアキナに任せるよ」

「はい！」

「うす！」

「うん！」

それだけいうと、なのはさんは一度だけニコリと笑い、ハッチから飛び降りた。

空中でセットアップし、一気に目標へと向かって行った。次の瞬間には姿すら見えなくなっていた。

俺達は視線を残ったリイン曹長へと向ける。

リイン曹長は全員の顔を見た後、うなずき、今回の任務の説明を始めた。

「任務は2つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そして、レリックを安全に確保すること」

リイン曹長はモニターを起動させ、車両の簡単な見取り図をだした。

「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊でガジェットを破壊しながら車両前後から中央へ向かうです。レリックはココ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニング、どちらか先に到達した方がレリックを確保するですよ」

「」「」「はい！」「」

なるほど。挟み撃ちなら逃がす心配もないしな。

ライン曹長は「で、……」といいつつ、身体を白銀の光に包みながら華麗に一回転させる。そして騎士甲冑を身にまとった。

「私も現場に降りて管制を担当するです！」

といった。

さて、一通り話も終わったところなので

「一つ、質問が」

「なんですか？ アキナ」

「俺はどうすれば？」

今回の説明のなかで一度も出てこなかったエア―。まさかココでお留守番なんてないよな？

「そうでした！ アキナは今回ライトニングについてください！ まだ二人だけでは大変だと思うのでサポートしてあげてくださいよ！」

「なるほど、了解です……——と、言うことらしい。よろしく頼むな、二人とも」

「「はい！！」」

ん。元気だ元気だ。

さて、時間は少し進み、投下ポイントへ到着。

「よし新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるお陰で、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!？」

「「「「はい!!」「」「」」」

全員返事をする、まずスターズの二人がハッチへ。

「スターズ03、スバルⅡナカジマ」

「スターズ04、ティアナⅡランスター」

「「行きます!」「」

そして躊躇なく空へ躍り出た。

すげえなあいつら。俺初めてのときビビッてセットアップしながら降りたぞ？

「次! ライトニング! チビども、気をつけてな!!」

「「はい!」「」

次はライトニング部隊。

ちびっ子二人がハッチへ進む。が、しかしキャロは不安なのかなかなか飛び降りることができなさそう。それに見かねたエリオがキャ

口に声をかける。

「いっしょに、降りようか」

「……え？」

一瞬驚いた顔をしたキャロの手をエリオが取り

「ライトニング03、エリオ〓モンディアル」

「ライトニング04、キャロ〓ル〓ルシエとフリードリヒ」

「きゅく」

「「行きます！」」

外へ身を躍らせた。

あいつら見せ付けてくれるなあ……俺なんか彼女もいないのに。

「ラスト！エアー！」

「うす！」

俺もハッチから飛び降りようとしたが寸前でヴァイス陸曹に止めら

れる

「旦那、どうか新人達のこと頼みます。まだ、不安ばっかだ思うんで」

「もちろんっスよ。ただヴァイス陸曹、旦那はやめてくれ。後敬語も。まだ17っスよ……」

「っは！ソレもそうだな」

さすがに旦那は恥ずかしいよなあ……
っと、ソレはさておいておいて俺は今度こそハッチへ。そして

「――エア―、アキナ||ナカジマ。行きます！」

空へと身を躍らせる。

顔にバシバシ当たる風圧を受けながら、言葉を発する

「ガードビーツ！！セットアップ！！」

《Stand by ready. set up.》

降下しながらバリアジャケットを展開。俺の魔力光は緑なので、緑

色の光が体を包む。
そしてそのまま車両へ飛び降りた。

「ふう……遅くなった。エリオ、キャロ、いるか？」

「はい！」

とりあえず全員無事に着地できたらしい。

ここで自分の姿を確認する。

黒コートに黒のズボン。ところどころに赤いラインが入ったデザイン。ガードビーツはピアスとして耳についている。

このなかで特徴的なのは左肩だけ布地がないことか。左肩だけは肩の部分で布が切れていて、そこにはファーがついている。正直、バリアジャケットとは思えない姿だ。まあ、センスは良いが。

ライン曹長によると

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちよつと、癖はありますが、高性能です」

だとか。

だけどこんな姿の人いたかなあ……。

つと、こんなことをしてる暇はないようだ。前方から流れてくる音から察するに、既に戦闘は始まっているらしい。

「行くぞ！二人とも！」

「「はい!!」」

中央を目指すとのことなので、俺らは中央へ走っていく。
ところどころがジェットがいたが、難なくこなすことができた。
ところが問題発生。

「なんだあ、こいつは？」

8両目か、そこいらへんで見たことのないガジェットと遭遇。
数本の腕を伸ばし、襲い掛かってきた。

「やべえ! 散開!!」

俺らは前後二手に分かれた。
そして襲い来る腕にキャロが反撃。

「フリード! ブラストフレア!!」

「きゅく!!」

フリードを使った魔法だ。
しかしその魔法は腕によって弾き飛ばされてしまう。
しかしその隙を見逃さず、エリオが突進する

「うおりゃああああ!!」

しかし

「堅い!!」

ガギン!という鈍い音を立ててはじき返されてしまった。

さらに、ガジェットが一度光ったと思うと

「AMF!」

発動していた魔法がかき消された。

エリオはストラダでアームの腕を押さえる。しかしその様子は如何にも危うい。子供の力だ。どこまで持つか分からない。ミスると弾き飛ばされて命の危険にもなりえる。

「キャロ! いいか? ここで援護だ。とはいってもこのAMF。絶対に無茶はするなよ! 俺はエリオの援護に行く!」

「え、あ、はい!!」

そういつてエリオの元へ向かった。正直キャロ一人を残すのは避けたかったが、そうもいられない状況だ。

「エリオ! 無事か!」

俺は自身の魔法でアームを吹き飛ばしながらエリオに呼びかける。どうやらAMF内でも一瞬なら魔法が作動するらしい。発動したプロテクションはすぐに消えてしまったが、エリオの救出には成功した。

「大丈夫です!!」

しかしそんなことをいうのも束の間。

ガジェットは俺らに狙いを定めると、レーザーを発射した。エリオは飛び越えてよけ、俺はプロテクションを作動させつつ何とかよける。

しかし、レーザーの数が多く、よけ切れなかったエリオは地面に転がった。そこに太い腕が迫り来る。一つは何かガードしたが、

「うわぁ!!」

一つはエリオに当たってしまった。

「エリオ!!……クッ!!」

エリオの救出に行きたいが、こっちも手が離せない。

一つの腕とレーザーを捌ききるので精一杯だった。

その間にもう片方の腕は気絶してしまったエリオの体をつかみ、天

井を突き破る。

まさか……こいつエリオを捨てる気か!!? くそ……こっちは手が離せねえし……残っているのは……

「キャロ!! エリオを頼む!! 手が離せねえ! 気絶してるだけだからすぐに目は覚ます!!」

キャロに呼びかける。

なんとか投げられる前に回収してほしいところだ

「……っ!!」

しかしキャロは動けず、成り行きを見守ることしかできなかった。そして

「ああ!!」

エリオは外へ放り投げられてしまった。列車の軌道上ではないので列車に乗ることなく、無常にも猛スピードで落下していく。ソレを内部から見ていたアキナは、さらに呼びかける。

「キャロ!! 今エリオを救えるのはお前だけだ!!」

「……っ！ー！」

「自分の力を信じる！！！」

その言葉を聞き、キャロはエリオを追いかけるよう、列車から飛び降りる。

「エリオ君！！！！！」

アキナはその様子を見て、つぶやく。

「頼むぜ？キャロ。お前の力は誰かを傷つけるものじゃねえ。A M Fも弱まったお前なら使えるぜ？竜魂召還」

そして目の前のガジェットに向かい言い放つ。

—
—
—
—
—
—
—
—
S
h
a
l
l

w
e

D
a
n
c
e
?
.

第7話 星と雷と風（後書き）

と、いうことですね、中途半端なところでした。

ほんとうは戦闘終わらせたかったけど、無理でした。眠いです。

アキナの服装のイメージはFF7ACのクラウド。

もはやバリアジャケットではないのは秘密です。

では、感想待ってます。

第8話 新しい力（前書き）

今回フルで戦闘！

描写が難しいです（笑

矛盾点などありましたらよろしくです

第8話 新しい力



Side…アキナ

—————Shall we Dance?

その言葉の返事はガジェットによるレーザー攻撃だった。レーザーは的確に急所を狙っていて殺しに來ていることが伺えた。アキナは落ち着いてソレを見極め、体をひねることでよけた。と、同時に冷や汗が頬を伝う。自分の周りにはAMF空間、さらに相手の表面には魔法を防ぎ、とてつもなく堅い特殊装甲だ。とても一人では太刀打ちできないだろう。本来ならこいつを倒して先に進むべきなのだがそれはできないと判断してエリオたちの復帰を待つことにした。

「ガードビーツ！エリオたちとの距離は！？」

《ざっと2Km半といったところか。まだまだ離され続けていくな。復帰には少なくとも10分はかかるだろう》

「ちっ！！もうそこまで離されたか……………エリオたちが帰ってくるまで持ちこたえられるか？」

《お前の力量次第だろうな》

だよなあ……

だとしても、このままやられるというのはつまらない。腕の一本ぐらいはつぶしておきたいものだ。

アキナは攻撃に移るべく、ガードビーツに命令する。

「ガードビーツ！！座標計算頼めるか！？」

ソレに対し、ガードビーツは

《座標？何をする気だ？》

そう答えた。

第8話
新しい力

アキナは自分の耳を疑う。

どーゆーことだよ。いまこいつ何をするったか？

「いや、おまえ……俺の魔法知ってるだろ？座標を指定してそこに攻撃だよ」

《何言ってやがるこのウストラトンカチ。こっちはてめえが訓練でてねえからデータが足りねえんだよ》

んなー！

ってことはこいつまっさらか！？何も出来ねえじゃねえかなのはさんの言葉が頭の中で響き渡る

————アキナ君はデータが少なかったから……

————っというか元のデバイスも壊れちゃったから使いにくいかも………

あああああああ！！！！しまった！！

俺だからこそ訓練で慣れなきゃなんじゃねえか！！

「つてことは俺が使える魔法は？」

《まあ、実質0だろうな。一応基本になる魔法はすべて入ってる。それとさまざまな戦闘記録。主に隊長たちのものが多い。マイスターからは『今後の訓練で把握していけ』といわれていた》

「……なるほど」

戦闘記録か……それはうれしいな。今後の戦略を立てるのにも役に立つし、いい教材になる。今度全部見るか。つて！そんな場合じゃねえ！！

こうしている間にもガジェットからの攻撃は続く。主にレーザーがきつい。迂闊に近づけないレベルでとんでくる。ソレに対しプロテクションで対処。

「うち！！ガードビーツ！先にこいつの攻撃を防ぐ！プロテクション張るぞ！！」

《……了解。Guard》

なんで嫌そうなんだよ。

とはいいつつも目の前にシールド上の物を展開。つてかいまこいつなんていった？『ガード』っていわなかったか？後で聞いてみよう。それにしても

「……すげ！ココまででけえの見たことねえ」

張った魔法は車両の横幅分の長さもある。それにして防御力も高いようだ。レーザーが当たってもびくともしない。

《ふん！俺にかかれば当然だ》

偉そうな奴だ。とはいってもこの凄さには感服するものがある。ストレンジデバイスとの違いはコレか。

まあ、これで当分のレーザーは防げるか。AMFも発動しているのだろうが、なぜか消えないし。どちらにせよ、レーザーが厄介なのは変わらない。ならまずレーザーの発車部分を破壊したほうが得策だろう。そう判断したアキナは発射口の破壊に重点を置くことにした。

「よし！まずレーザーをつぶす。見た限り発射口は中央にある3つの部分だけだ。なんとか破壊したい。何かいい方法はあるか？」

《あるにはある。基本的に発射口というのは物質の出入りが激しいため防御力が低い。簡単に壊れるだろう。だがお前に何がつかえるか分らん。お前はどんな魔法を使うんだ？》

「基本的には防御魔法だ」

《射撃や、魔力による攻撃付加は？》

「できねえな」

《……使えねえな》

「何だったゴルァ！」

なんだろう、こいつとは馬が合わない気がするんだ。

《だが、仕方ない。射撃が使えない、魔力による威力付加も無理、となればお前お得意の防御魔法でいくか》

「……！？どうするんだ……！？」

《やることは簡単だ。だが出来るかどうかはお前次第だな。まあ、お前向きだ》

そういわれ、アキナは目に火を宿す。

そこまでのうならやってやるぜ……！！

既にやる気満々、といった具合にアキナはたずねた。

「何をするんだ？」

ソレの返答は

《防御魔法による射撃を行う》

と。

「どういふことだ？」

《簡単に言えば防御魔法の攻撃変換だ。そろそろこのガードも解けちまうから手短かに説明する。一回で聞けよ》

ガードビーツによると

俺の使う防御魔法で形成した何らかのものを相手にぶつけるらしい。モデルはハラOWN隊長のフォトンランサーらしい。スピードと貫通力・命中時威力が大きく、誘導はできないが、スピードは速い魔法だそうだ。今回使う魔法の絶対条件として魔力による物質の形成が出来ること。それはクリアだ。前にやった模擬訓練で三角錐の物体を作った。大きさも変幻自在だ。

《さっそく第一段階に入る。まず棒状、槍状のものを形成しろ》

「りよ、了解」

早速魔法の形成。

今までも同じようなことをやったことはあったが、作ったことがあるのは簡単な立体。直方体や、三角錐など。おもに三角錐が多かつ

た。今回のように複雑なものは初めてだ。

これは難しいな……頭痛くなってきた……!! って、エリオのストラーダ真似れば良いじゃん。

と、まあなんとか完了。

とはいっても出来たのはなんとも不恰好な槍……のようなもの。作れたのは6つ。綺麗な直線状のものではなく、明らかにごつごつして、太い。それも大きさがばらばらだ。

……………魔力の誘導がうまくいかねえ……

《下手糞だな。後は簡単だ。ソレを吹きとばす。もちろん射撃魔法じゃねえからこっちから後押しする必要がある。……おい、運動量保存の法則は知ってるな?》

「あ、ああ……」

なんでココで? 運動量保存の法則とは『ある系に外部から力が加わらないかぎり、その系の運動量の総和は不変であるという物理法則』だ。

あ? だれだ今コピペだろって言った奴。

例をとれば振り子の実験みたいな奴だ。

5個ぐらい連ねた振り子の一番外側を落とすと反対側の奴が動くって奴。

まあ簡単に言えば一度与えた物体の運動量の合計は ずっと一定で

決して変わらないっつーことだ。
何でこんなことを……

《ソレを使う。いいか？こつからのことを簡単に説明する。》

お前の作った槍型^{ソレ}防御魔法の尻を叩いて思い切り相手にぶっ飛ばせ
！！
》

なるほど。とアキナはにやりと笑う。

アキナは既にセットされている槍方防御魔法の後ろに長方形の防御魔法を生成。0の状態から一気に伸ばし、防御魔法にたたきつけた。すると勢いよく槍型は飛んでいき

ガス！！！！

1本の槍型^{ランス}防御魔法が発射口に当たる。
見事に貫通し、そこからはレーザーが飛ばなくなった。

「なるほど……確かにコレは俺向きかも知れねえ。攻撃魔法が使えなくてもこれなら十分攻撃になるわ」

そういつてアキナは新たに槍型^{ランス}防御魔法を生成。
そして同じよう吹きとばした。

「っはは！いいねいいね！！おい、この魔法、なんていうんだ？」

《名前だど？……そうだな：『ガード・ランス』としよう》

「ランスか。イイネ！かけえじゃねえの！！」

そういつつ更に魔法を形成。

《まったく……調子のいいやつめ……！！魔力反応！チビたちが帰ってくるぜ！あと1分だ！》

マジか！なら早く壊すか。

エリオが来たら本格的に攻撃を仕掛ける！！

アキナは口元にニヤケを残しつつ、ラスト1個になった発射口にめ
かけ、魔法を飛ばした。

Side..アキナ End.



Side..キャラ

『キャラ!!今エリオを救えるのはお前だけだ!!——…自分の力を信じろ!!』

その言葉が私を動かした。

部族から追われ、一人だった私。自分の力も制御できず、管理局に引き取られた後もたらい回しにされてきた。でも、やっとできた自分の居場所。ソレを壊すのが怖くて使わなかったこの力。

今いる六課は自分にとって大切な場所だ。ソレが目の前で崩れかけている

目の前には

それを今使わないでいつ使うか!!!!

私はもう、守られるだけじゃない。

「守りたい。優しい人、私に笑いかけてくれる人たちを、自分の力で……守りたい!!!!!!」

キャラは落ちていくエリオの手をとり、自分の元へ引き寄せる。気

絶してしまっているエリオを胸に抱き、言葉をつむぐ。
周囲を桜色の魔力光があたりを包みこむ。

「フリード。不自由な思いさせてごめん。私、ちゃんと制御するから…！」

「行くよ……！！竜魂召還！！！！」

あたりに強い光が充満する。

そして続けてキャロは唱える。下には巨大な魔方陣。空気の動きで目を覚ましたエリオもその光景に圧倒される。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ……竜魂召喚！」

私の声に答えるように、フリードの咆哮が響く。

魔力光が消えた時、そこには本来の姿になったフリードがいた。

フリードの意識もはっきりしてる。暴走状態じゃない。
無事、召還完了だ。

「ふう……あ！」

無事成功して、安堵した後、下を向くと目を覚ましたエリオがいた。

互に見つめあい、数秒が経過する。

「!?!?!、ごめんなさい!?!」

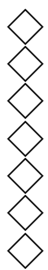
「う、うん。こっちこそ!?!」

わわわ私の馬鹿!?!

何やってるの!?! よく考えたらお姫様抱っこ……

そこには桜色の空気が広がっていた。

S i d e .. キ ャ ロ E n d .



チィ……これはきついな……

アキナは見事レーザーの発射口を破壊した。

しかし、ソレによって動き出したのは2本の腕。一本一本の攻撃力が高く、一撃当たっただけでもガッツリ削られてしまう。防御魔法で防御しようとも

《おまえ魔法下手すぎだ！一からやり直しやがれ！！》

「んだとゴルア！！それでも師匠に許しはもらってんだよ！！」

《誰だそのへっばこ師匠は！！鍛えなおしてやるわ！！》

どうも魔力構成が悪いらしく魔法構成自体にムラがあるらしい。一撃で破壊されてしまう。

どうするかな…………

！！この魔力！

次の行動に迷っていたとき、後方から頼もしい魔力反応が

「エリオ！キャロ！！無事だったか！」

「アキナさん！！フリード！ブラストレイ！！」

「ファイア！！」

おお！頼もしい！！
にしても、立派じゃねえか白竜

フリードから放たれた巨大な火炎弾は見事にガジェットに直撃。しかし堅い装甲に阻まれてしまう。
アキナはエリオに向かって叫ぶ。

「怪我はないか！！」

「はい！大丈夫です！」

「ならよかった！……早速で悪いが頼んでいいか！あの装甲は砲撃とかじゃ抜けねえ！」

「了解です！僕とストラーダが」

「よし。動きは俺が封じる！エリオは必ず当てろよ！！……それとキャロ！！」

「は、はい！」

キャロがフリードの上からこっちを見た。

「……よくやった！！」

キャロは一度驚いた顔をしたが、すぐに笑顔に変わった

「はい!!」

「よし!! キャロはエリオの強化!! いくぞ!!」

「「はい!!」」

全員で目の前のガジェットの殲滅に当たる。
まず動いたのはキャロ。

「我が乞^{せう}うは、清銀の剣つるぎ。若き槍騎士の刃やいばに、祝福の光を」

《E n c h a n t F i e l d I n v a d e》

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

《B o o s t U p S t r i k e P o w e r》

キャロの両手に桜色の光がともる。
それを確認してアキナが動き出す。

「ガードビーツ!! さっさと終わらせる! 力貸せよ!!」

《それに見合う結果を残せよ?》

アキナの周りに緑色の光が。

ガード・ランスの応用型!!

アキナはさっき作った^{ランス}槍型防御魔法を上空に設置。その数30。そして手を上空にかざし、一気に振り下ろす。

「落ちろ!!」

《Guard, Fall!!》

地面に向けて一気に打ち出す。
自由落下する^{ランス}槍型防御魔法は大量にガジェットへ落ちる。そのうち半分は本体に当たったり、それたりしたが半分は暴れまわる腕に直撃。見事に列車の天井に縫い付けた。

「エリオ! いまだ!!」

「はい!!」

槍を構えてたっていたエリオはフリードの背中から飛び降りる。それにあわせてキャロが魔法を発動

「てやああああっ!!」

「ツインブースト、スラッシュードストライク!!!」

キャロの魔力がそれを追いかけてストラーダの刃に吸い込まれる。
刀身から光が溢れる。見事に列車上部に着地したエリオ。

「一閃必中!」

にガジェットに突進し、その中心にストラーダを突き立てた。

「でりやああああっ!!!!!!」

そして一気に振りぬき両断。
ガジェットが爆発する。

「ふう……なんとかなったな……エリオ、お疲れ」

「あ、はい!」

「キャロも!よくがんばった!」

キャラはそれを聞いて少し笑い、息をつく。
肩の力が抜けたようで、安堵しきった顔だ。余裕が出たのかエリオに手を振っている。
そこへ通信が入る。

「ん、任務完了らしい。俺らはこのまま待機。事後処理の引継ぎだつてよ」

と、言っただけは良いが

「フリードの上でなんともつかれきった顔してるし。このまま働かせるのは心が痛むなあ」

フリードの上では談笑しつつもつかれきった顔のエリオとキャラ。
この空気で働けというのはなんとも心が痛い。

「じゃあ、アキナ君一人でやる？」

「うお！！いつの間に」

気づけばそばになのはさんが。
まあ、なのはさんの言うことももっともだし、エリオがんばったしな。仕方ねえ、俺一人でやるか。

「まあ、ちびっ子二人は疲れてるだろうっすから」

「あ、あれ？冗談だったんだけど……まあいいか。私も手伝うから、ちよっと待ってて」

そういつてなのはさんはちびっ子二人のところへ。ってか冗談だったんすか。なんつーか働き損って感じが凄い。
さてまあ、最後の仕事と行きますか！！

俺は張り切って現場へ戻った。

結局引継ぎ、今回の報告書、列車の始末書、損害、フォワード陣の動きなどの書類を作るのに夜までかかってしまい床に就いたのは翌日3時だったりする。

次の日筋肉痛だったのは言うまでもない。

第8話 新しい力（後書き）

以上です

どうでした？まあ、悪くはないかと。でもなんか惹きつけるものがないんですよ…何が足りないんでしょうか？

あと今回Side使ってみました。そのところ含め感想くれるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2648y/>

ある守護者の話。

2011年11月20日16時58分発行